

近藤誠 医者に殺されない(新常識)

PSA値が上がったり下がったりする場合は99%以上ががんもどき

私のセカンドオピニオン外来には、がんを疑っている段階の方々も相談にみえます。もしがんだったらどうしよう、精密検査を受けるべきなのか等がその内容です。Xさん(男性、58歳)は、会社の健診で調べたPSA(前立腺特異抗原)が高値で、前立腺に針を刺して組織を採取する「針生検」を受けるように医者から言われ、どうしたものかと相談にいられた。PSAは正常前立腺から血中に分泌されるタンパク質で、前立腺がんだと異常上昇することがあり、「腫瘍マーカー」として人間ドックや健診の採血項目に入っています。



近藤誠 1948年、東京生まれ。近藤誠がん研究所・セカンドオピニオン外来所長、前慶応義塾大学医学部放射線治療科講師。第60回菊池寛賞受賞。近著「近藤先生、『がんは放置』で本当にいいんですか?」(光文社新書)。

前立腺を全摘しても放置しても死亡率は変わらない

「PSA値は、一昨年の健診では3.9、りつとるので、肛門下がったのですが、腺炎や敗血症などの感染症が見られることがあり、ごみですが、死にたいです。泌尿器科で針生検を勧められました」

「PSA値が4を超えたら、前立腺がんが疑わしいから、生検を勧められるのが一般的です。ただ、生検でがんが見つかるのは3割程度です」

「生検の後遺症が心配です」

「手術は前立腺全摘になるので、男性機能の喪失、低下を覚悟してください。また尿道を切断し

尿道狭窄による排尿困難の増加が見込まれていいます。陽子線治療という難の増加が見込まれてい分は放置した比較試験が来ます。結果、前立腺の数値が同じなのに、PSA検査を定期的に行う、他方は何か自覚症状が出るまで検査しないという試験です。結果、検査グループと放置グループの死亡率は変わらなかったのです」

「治療した場合に寿命が延びるかどうかを検討してみよう。アメリカで、性機能の低下や

定期検査をしてもなくても結果は同じ

「それでどうしてPでなく、病院のドル箱にSA検査や手術が行なっているため、と言えられてるんですか」

「もしがんだった場合、転移がありそう合、転移が早期に必要ありません。PSA検査で発見された前立腺がんの9割以上が、がんもどきです。あなたのようにPSA値が上がったり、下がったりする場合は、99%以上が、がんもどきでしょう。生検を断り、前立腺がんのことは忘れて、もう検査を受けないのが一法です」

二月曜掲載

おしえて! ドクター Doctor Vol.40

より安全で失敗のない 最先端のレーザー白内障手術とは!?

より安全で失敗のない手術を可能にした。最先端のレーザー白内障手術とは!?

医学部眼科の教授も務めるなど国際的に活躍している「富田実院長」に話を伺った。

「症状が進行して日常生活に支障が出るようであれば、濁った水晶体を取り除き、代わりに人工の眼内レンズを挿入するの一般的な手術の方法です」

「従来の保険が適用される単焦点レンズを入



富田実 院長

遠くも近くもよく見えるようになる マルチレンズの白内障手術

適用外ながら、遠くも近くも焦点が合う多焦点レンズを選ぶ人が急増している。富田院長は言う。

「当院で白内障手術を受けた方の約9割が、この多焦点レンズを選択されています。手術の正確性であること、富田院長は指摘する。

「濁った水晶体を取り除く際に、まず水晶体を包んでいる袋(嚢)の前面を丸くくり抜きます。医師がフリーハンドで行うのが1.0にまで見えるようになってきます。円にくり抜くことは不可能で、歪んでしまつと多焦点レンズの性能が十分

70代になると、ほぼ全員が老人性白内障になっている

富田院長は、手術の正確性という課題を解決するには「コンピュータ制御で正確な手術ができるレーザー白内障手術がベストな方法です」と目をみせる。これは、白内障のレーザー装置は超高度。東京でレーザー白内障手術を受けられる施設は23施設ほどしかないが、もちろん富田実院長クリニック銀座にも、レーザー白内障手術が導入されている。

「白内障は、まだ見えるから大丈夫だと放っておくと、水晶体がどんどん硬くなって、手術が難しくなります。70歳前後で白内障の症状があれば、早めに手術をしたほうがいいですね」

30代の頃のような視力を手に入れられるような手術をして、人生を謳歌したほうが賢明だろう。

認知症確定診断まで平均15カ月

日本イライリリが認知症の人と家族の会の会員465人を対象に「認知症の診断と治療に関するアンケート」を行った。

その結果によると、「認知症を疑うきっかけとなる変化に気づいてから最初に医療機関を受診するまでにかかった期間」は平均9.5カ月。「最初に医療機関を受診してから確定診断までにかかった期間」は平均6.6カ月。そして、「変化に気づいてから確定診断までにかかった期間」は平均15カ月だった。

また、認知症の人の多くは、「遅すぎた」と感じている。「適切な治療がなされなかった」「診断がなかなかとれない」「長い間不安だった」と精神的負担を感じている人も、認知症患者の家族を含めて多かった。

確定診断の時期が遅かったと感じた理由は、「早く治療を始めたいから」「早くしないと病状がどんどん進行してしまうから」「いろいろ早めに準備ができなかった」「医療に関する情報を入手できなかった」が多数。

「物忘れ外来」など、認知症診断・治療を専門とする外来は増えている。しかし、患者が望む方向には十分に機能できていないのかもしれない。

親をボケさせない介護

「ついでに場所を移らなきゃ」

「お出かけタイ」と称して、認知症などのご本人、介護者、介護施設スタッフ、医師、看護師などが、まじりこみで、旅行に出かけています。これまで北海道9回、お伊勢さん1回、カニツアー5回など。先日は、総勢40人で2泊3日で沖繩へ出かけました。

最高齢は、要介護5のトミちゃん、99歳です。トミちゃんは車椅子。彼女以外にも、押し車、杖の杖、ボケた人などいろいろ。介護者や医療関係者によって「ボケているのに旅行なんて、無理無理」と言われることもありますが、ボケてからって、施設や自宅に閉じ込める。旅行に閉じ込めるのは、生きている実感を奪うことだと思えます。トミちゃんが手づかみで食事をしようと、周囲は全く気にしません。本人が楽しんでることを一番!

車椅子でも押し車で、も杖でもボケでも、みんな外に、旅に出ましようよ!

旅に出よう

「車椅子の旅」は11年前からほとんど増えないようにです。北海道には観光バスの中央をリフトに改造し、車椅子の人でも快適に旅行できるようにしたバス会社がありました。利用者がほとんどいないので潰れてしまいました。

介護保険が始まって14年。昼間、街からお年寄りが消えました。朝と夕方に、ラチ車、(本人が希望して乗ってない)が街を走り回り、お年寄りをひきさらってハコ(施設)に閉じ込める。旅行に閉じ込めるのは、生きている実感を奪うことだと思えます。トミちゃんが手づかみで食事をしようと、周囲は全く気にしません。本人が楽しんでることを一番!

